顔

烏丸一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
顔

【Ｎコード】
Ｎ４２２９Ｖ

【作者名】
烏丸一郎

【あらすじ】
ある傍若無人な男の物語です。

（前書き）

前回投稿させていただいたものを改訂しました。

誤字、脱字の修正は完了してると思いますが、見受けられた場合は申し訳ありません。

かつては禿げ鼠と呼ばれた、時の猿顔太閤がそのお膝下である大阪の天井から、広大な天下を眺めていた頃の話である。運河が多く、「水の都」とも称されていた大阪から遠く離れた江戸、未だ狸の幕府が開かれていない時代であるため、後世に伝わるほどの繁栄も誇ってはいない町のなかに、多くの門下生を抱え江戸一の名門と謳われる剣術道場があった。

その門下の内に、中山長次郎という名の男がいた。
この男は、二十四五ほどの若さにしてこの名門道場の師範代を任されるほどに門下生の誰よりも卓越し、負けを知らない剣の腕を誇っていた。それに長次郎は背丈も高く立派な体格をして、その面構えはといえばなかなかに眉目秀麗で、太閤殿下とは雲泥の差といったところである。その整った容姿からは、竹光片手に日々鍛錬に励んでは汗を流す、そんな長次郎の姿が想像できるほどに爽やかで、白を基調とした浪人服の似合う男であった。

しかし、この爽やかな長次郎は、門下生達や長次郎の師であり道場主であるご老体からも全くといっていいほどに好かれておらず、むしろ疎ましく思われていた。なぜかといえばこの男、万人から好まれるような出で立ちとは裏腹に、その素行や態度は非常に悪く、それに加え折り紙付きの乱暴者で、同じ道場の門下生達からは道場主であるご老体よりも先に恐怖の対象とされており、抜きん出た剣の腕や立派な体格のせいもあってか今やこの道場の者達のうちで、門下生はもちろんのこと、老衰ですっかり腕の衰えてしまったご老体も含め、この道場で一番の強者である長次郎に逆らえる者はいなくなっていた。

それをいいことに、この男は道場の内外を問わず悪行ばかりをはたらいていたのである。道場内での主な悪行といえば、弟子達への悪戯は当然のことながら稽古と称した一方的な暴力、失神させられる者がでるのは日常茶飯事のことで、長次郎の機嫌が悪い時には腕を叩き折られる者までいた。なかにはそのせいで二度と物を握れなくなった者もいれば、そんな長次郎の悪行に耐えかねて道場を去る門下生も少なくなかった。仲間が長次郎に嬲られている時、他の門下生達はどうしているかというと、長次郎の怒号と嬲られ役の苦悶の声が響き渡る稽古場で、竹光が肉を叩く生々しい音に震える体を諌めながら、師範代の気がおさまるのまで只々臆病風に吹かれ、正座で座りつくしたまま待っているだけであって、なかには己の身を案じるがあまりに「あいつは、運が悪かった」そう呟く者もいるのだった。

そして道場の外での悪行といえば、そのほとんどが酒にまつわる事ばかりであり、つい一月ほど前にも酒に酔った長次郎は遊郭の女の顔をその原形すら止めぬほど腫れ上がるまで殴り続けたばかりである。その訳といえば、いつもの如く酔っ払った長次郎は、酌をしていた遊女に無理やり行為を迫っては強引に邪魔な着物を剥がそうと襟元を引っ掴んだのである。

それを嫌がった遊女がそれを拒もうと咄嗟に長次郎の腕を掴んだ拍子に遊女の伸びた爪が彼の腕に刺さってしまい、それが長次郎の逆鱗に触れたのだった。そのあとの遊女といえば、紅潮し眉を釣り上げた鬼のような男に襟首を掴まれたまま「俺が誰だかわかっているのか、　二度と商売の出来ない不細工面にしてやろう」そう罵声を浴びせられながら、唯ひたすら大事な顔を石のように硬い拳骨で殴打され続けるだけであり、泣き喚いていた遊女が悲鳴を上げなくなっても、長次郎はやめなかったのである。そこに偶然通り掛かった別の女が長次郎の唸り声に気づいて、襖を開けた途端に女の悲鳴が

遊郭の中に響き渡った。邪魔だからと下の階で飲まされていた四五人の門下生達が悲鳴に気づいて、暴れる長次郎を止めに入り、うちの一人はいつもの臆病風に吹かれて立ちすくんでいたが、残りの者は「中山先生、　それ以上は死んでしまいます」と舌を噛み切るような思いで懇願し力の限り長次郎を羽交い締めにしたが止まるはずもなく、知らせを聞いたご老体が遊郭へ出向いてやっと事は終息したのである。

その後、長次郎に殴打された遊女はあの罵声通りに二度と客の取れない顔になってしまい、止めに入った門下生の一人も遊郭の外へと投げ飛ばされ、受け身を取る際に腕を骨折してしまっていた。あの出来事から一月あまり、ご老体は弟子であるはずの長次郎に一切の刑罰を与えることも出来ず、そんな己の情けなさに困り果てたあげく病に伏してしまった。それ以来、長次郎の悪行はその痛烈さを一層に増すばかりで、道場は真に長次郎の私物となる日も近いだろうと、当に奈落を待ち受けるような門下生達が真としやかに囁きだしていた頃だった。

暮れ六つ、長次郎は野暮用を済ました帰り道、道場へ向かう道をつまらなそうに歩を進める長次郎に、知らぬ浪人が話し掛けてきたのだった。少し幼さの残った顔をして、人のよさそうな雰囲気をもった男は驚いたように目を大きくして口を開いた。「失礼とは存じますが、もしや中山先生では御座いませんか？」どうやら長次郎のことを知っているようであり長次郎が「如何にもそうだが、俺になにか用件か」と淡々とした、いかにも無愛想な口調で答えると、そんな長次郎の態度を気にする素振りもみせず男は続けた。「わたくし田口と申すしがない浪人で御座いまして、江戸では知らぬものはおらぬと謳われる、中山先生に是非お会いしたく道場へ伺おうとしていたところでして」などと田口は長々と話しだし、鬱陶しくなった長次郎がさっさと追い払ってしまおうとした時であった。

田口は立ち話も失礼であるから是非、長次郎に酒をご馳走したいと申し出たのだ。途端に長次郎の機嫌は良くなり「ちょうど退屈していたところだ」と上機嫌に田口の誘いを受けると、何処の馬の骨かもわからぬこの男に連れられるまま、江戸の町を歩いて行った。

夜も深まり、時は丑の刻に近くなっていた。
長次郎はすっかり酒に呑まれ、千鳥足を田口に支えてもらいながら家路を歩いている。その姿からは師範代の風格など微塵も感じられず、剣術家としてはあまりにも無防備であったが、長次郎は未だに夢想にふけったままのように、舌の回らぬ酒臭い口で田口へぶつぶつ「いやぁ、田口殿にのせられてすっかり酔ってしまった」と呟く。実のところ、長次郎は酔うつもりではなかった。この男とて一端の剣士でありそれぐらいのことは心得てはいる。酒に酔う時には必ず護衛代わりに門下生を連れて行っており、一人の時は酔うほど酒を飲むことはしなかった。しかし、この田口という男、非常に饒舌で「中山先生は近くで見れば更に男前でございますなぁ」などと煽てられているうちに、一本また一本と酒を空にしていたのだった。もし今誰かに襲われようものならば、いくら腕の立つ長次郎でもひとたまりもないことは田口に支えられているこの男自身がよくわかっている。それ故に長次郎の呟きのなかには一旦の焦りと、この人の良さそうな男にしてやられたのではないかという疑念が見え隠れするのだ。そんな長次郎の内実を悟ったように、疑いようのない落ち着いた口調で田口は語った。「この田口が道場まで送り届けます、そう心配なさるな」そう身を案じた田口の言葉に、長次郎はもやもやとした疑念や焦りが取り払われるようで、「面目ない。」そう口にした言葉には、一抹の安心と、田口を疑ってしまったことへ詫びる思いが混在していた。

そうして田口に支えられるまま、黙々と歩いて今までになく暗い道

へ長次郎が差し掛かった頃、田口は左手でなにかを握りながら、長次郎の耳元へと囁き始めた。「中山先生、あなたがつい一月ほど前に殴り倒した女のこと、覚えていらっしゃるか。」その口調はどこか、田口の間欠泉のような怒りを噛み潰すように異様なほど穏やかで、虚ろなままの長次郎が「んん、女？　一月前？」と一人思量に耽るように呟くと、田口は眉を寄せて続けた「覚えていないのならそれでも構わんが、その女、俺の実の姉でな、あんたに殴られて以来顔が潰れたままで、表にも出れないことになってしまった。」今度の田口は明らかな怒りを交えた口調で語っていた。しかし、長次郎には何の話か検討もつかない。一月の間に長次郎は遊郭での出来事を忘れてしまっており、それほどにあの出来事は女を殴ることなど常である長次郎には大した話ではなく、いうまでもなくあの女があれからどうなったのかなど気にもしていなかったのだ。

長次郎はそれを正直に嘘偽りなく伝えた、「すまん。すっかり忘れてしまって見当も付かんのだ。」その長次郎の悪びれることも皆無な言葉を受けた田口は、支えていた腕を外すとおもむろに長次郎の首を掴み「姉は、これからの一生、あの踏みしめられた泥のような顔を背負って生きて行かなければならない、それは陵辱だ、姉の痛みを思い知れ」そう強い口調で吐き捨て、左手に握っていた物を長次郎の腹へ押し当て、江戸の闇夜へ走り去ってしまった。置き去りにされた長次郎は呆然とし、田口が何を怒ったのか、田口が自分に何をしたのか、酔いのせいか全く理解が出来なかった。そして長次郎が、自分の白い浪人服が鮮やかな朱色に染まっていることに気が付いた時には、もはや何もかもが手遅れであった。

明日の早朝である。
空は未だ夜の名残が残ったようにぼんやりと青褪め、そんな朝の空と同じ顔色をし、白であった浪人服は赤になり、その腹には脇差を立てた長次郎が道の傍らに横たわっていた。その周りには野次馬が

啄むように群がり、その群衆の中には道場の門下生達の姿も幾つか混ざって長次郎の顔を人々の隙間から覗き見ており、彼らの長次郎に向けられた眼差しは、世話になった師範代を厭うようなものではなく、むしろ「ざまぁみろ」といわんばかりの侮蔑に満ちて長次郎の顔を見下し、嘲笑っている。そんな様々な面持ちで群がっている群衆を突如として掻き分けながら長次郎へと荒い息使いでむかってゆく女、その髪や着物は美しいのだが、饅頭を潰した

ように醜い顔、「この、外道、畜生、死んでしまえ」そう叫びながら、屍でも眉目秀麗な長次郎の顔が潰れてなくなるまで女は狂ったように長次郎の顔を踏み続け、長次郎を呪い続ける悲しい叫びが江戸の空に空しく響いた。

（後書き）

お目汚しにお付き合いくださり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4229v/

顔

2011年10月8日13時36分発行